

故 吉田威教授を悼む

吉田さん、どうしてこんなに早く逝ってしまったのですか。

あなたは、病魔と厳しく闘いつつ、昨年十一月七日、ついに他界しました。残された私たちは、痛恨の念で一杯であります。

吉田さんは、一九三六年（昭和十一年）新潟県に生まれました。その後、新潟県立長岡商業高等学校をへて、一九五八年、一橋大学商学部に入學し、六二年に同大学を卒業し、研究者の道を志し、同年大学院商学研究科に入學し、飯野利夫教授のゼミに入り、会計学を専攻しました。六九年、同大学博士課程を終了しました。六九年四月に神奈川大学経済学部の特任講師、七一年四月に助教授になり、七七年四月教授に就任し、一貫して会計学を研究し、同時に学生の指導にあたってきました。

一方、七六年には、教務部副部長を、八一年には、大学院経済研究科委員長を務められ、教育研究の行政にも精一杯つとめてきました。

吉田さんは、学部学生と大学院学生の指導に情熱を注ぎ、学生の人気の的でもありました。

吉田さんの研究業績は、ドイツ会計学をわがものとし、独自の財務会計の研究を一貫させたことにありました。

私の知るかぎり、公刊された処女論文は、「損益計算の二元性」〔『商経論叢』第七巻第一号、一九七一年七月刊〕ではなかったかと思います。そこでは、貸借対照表の目的は状態表示というより、利益計算にあるとし、しかもこの計算が

損益計算上の計算とは異種のものであるとして、二元的な損益計算が企業の年次決算を構成しているのであると主張しました。さらに「年次決算に於ける財産法思考」(『ビジネスレビュー』一橋大、第一九卷第三号、七一年一二月刊)では、貸借対照表において利益計算がなされるとみる場合にも、また損益計算上の期間利益計算においてすらも、理論上というところの財産法なる特徴が支配していると主張されています。

その他、学術論文も多数にのぼっています。最近、門下生たちが、吉田さんの生存中の会計学に関する論文集を「体系化」して刊行しました。それが大著『経営経済的会計の基礎理論』(白桃書房、一九九一年三月刊、五二八頁)であり、この「吉田流会計学」を集大成したことは、会計学会にとっても有意義なお仕事だと思っています。

吉田さんは、この自己の大著をみると、きっと照れるかも知れません。門下生は、是非とも生前に刊行したかったことでしょう。残念でなりません。しかし、学会に大きな貢献を残すことでしょう。吉田さん、喜んで下さい。

わたくしと吉田さんとの関係は、専門分野が異なり、学問上の話は少なかったと思います。ときには、社会科学としての会計学の論理と倫理をものにしてほしいと一先輩として苦言を呈したこともありましたが、彼は「その通りです」「それには時間が欲しいなあ」といっていました。あるとき、シューマレンバッハの会計学や黒沢会計学について、議論したことを憶えています。それから吉田さんは学内では忙しい人でありました。

学生部長や入試センター所長なども引き受け、忙しいときを過したようです。学問に没頭したいという吉田さんが、こうした職務を引きうけていたことがなかなか理解できませんでした。

入試センター所長の頃だったと思います。わたくしが研究室で仕事をして帰るとき、大学正面玄関で、夜一〇時頃だったかと思います。偶然に彼と会いました。私がおそいですねといいましたら、入試のことで夢中ですといってい

ました。

吉田さんは、一方で教育研究を厳しくはたしながら、大学行政にも誠意をもって対応しました。学ばされることが多くありました。去る一月の経済学部教授会は、吉田教授の業績を評価し、名誉教授に推挙しました。どうか喜んで下さい。

吉田さん、安らかに眠って下さい、学部の教員は、あなたの仕事ぶりを受け継ぎ、学問の創造に向けて頑張ります。さようなら、吉田さん。

一九九一年十一月十四日

一周忌にあたって

経済学部長 清水 嘉治